

第1回

うえ
上杉雪灯籠まつり

「まつり」の原義は、神仏にもものを献上したり差し上げる意味の「奉る(たてまつる)」と同源と言われる。それは、人々の豊穡への願いと、恵みへの感謝と祈りをささげる行為である。また、「まつり」の古い意味はしきたりに従うことであるとも言われる。しきたりに従うとは、季節が繰り返しても、世代や歳月を超えて、力を合わせて大切なものを未来へ伝える人の営みである。このシリーズでは県内各地のユニークなまつりや催しを取り上げ、それを支える人々の思いや関わりにスポットを当てながら、地域の過去と未来について考えていきたい。

上杉雪灯籠まつりは、例年2月の第2土曜日・日曜日に開催され、上杉神社境内・松が岬公園一帯を主会場に市内中・高校生、会社、団体グループで作った約300基の雪灯籠、3,000個を超える雪ぼんぼりにローソクの灯がともされる。その幽玄・夢幻の光景に魅せられて、全国から延べ15万人前後の人々が訪れる。米沢市の冬の風物詩としてすっかり定着した上杉雪灯籠まつりだが、そのルーツは地元の人々の戦没者に対するひたむきな思いにあった。

最初は雪洞で始まった

昭和52年2月28日夜。暦のうえでは節分が過ぎても、米沢はまだ雪、寒さも厳しい。その晩も、深く息を吸うと鼻毛が凍り、吐く息で眉毛が白くなるような寒い夜だった。「月見の会」(現：観月会)のメンバーは、この日上杉神社社務所で、月見酒ならぬ雪見酒を楽しんでいた。メンバーは東光蔵元の小嶋弥左衛門(1923



第1回雪灯籠まつり 上杉神社参道の雪洞(栗林一雪)
※雪洞(せつどう)の呼び名は、昭和58年から「雪ぼんぼり」と改められた。

-2005)、米沢女子短期大学の上村良作(1918-1980)、山形屋佐藤富寿、河北新報記者杉村敬三、上杉神社宮司大乘寺健、小内山鴻、小野榮の諸氏7人。会長も会則もなく、季節折々の月をめ、酒を楽しむ集いであった。その夜は、暗くて重苦しい雪国の生活をはね返し、楽しい冬、雪の美や風情を味わう催しがなくものかに話題が集中した。誰からともなく「雪の中にローソクをともしてみたらどうか」と提案があり、ものは試しと、社務所の庭の雪の壁に、頭ほどの穴を掘ってローソクを立て灯をともした。部屋の電気を消すと、そこには、白銀の中にオレンジ色の光がゆらめく幻想の世界が出現した。その時の感慨を、小嶋さんは『上杉雪灯籠まつり20回記念誌』(平成9年)のなかで、「白い雪の中でゆらめく灯は幽玄で美しく、すっかり私たちの心をとらえました。“雪と灯”のまつりが醸し出された風景でした」と、述べている。

「これは雪月花だ」「メルヘンだ」「自分たちだけで楽しむのではなく、多くの市民に呼びかけ雪灯籠の宴をやろう」と話は盛り上がり、上村さんの提案で宴の名称は「上杉雪灯籠まつり」と決まった。

戦没者慰霊への思い

折しも昭和52年は戦没者の33回忌にあたり、小嶋さ

んはその年、沖縄・慶良間群島で行われた戦没者の海上慰霊祭に参加した。

小嶋さんは昭和18年当時早稲田の学生だったが、学徒動員により、海軍第14期飛行専修予備学生となり、鹿児島航空隊を経て、千葉県の新崎航空隊で敗戦を迎えた。その間に、仲間が乗る特攻機を何度も見送った経験を持つ。

沖縄の海上慰霊祭で、戦死した息子の名を、船上から海に向かって声を限りに呼び続ける老婆の姿は、小嶋さんの胸に強く焼き付いた。

小嶋さんと海軍予備学生の同期で元宇都宮大学教授の奥住綱男さんは、『20回記念誌』に寄せた長詩『雪国幻想』の一節で、次のように書いている。

老翁らは 元学徒兵
学業半場にして 兵役に就き
同期の友ら 百六十六柱
沖縄の海に 特攻散華し
二百四十五柱 比島セルベスの野に果てる
老翁らは 出撃間近
学校を懐かしみ 故郷を恋い
北の夕日を仰いで 校歌 里歌を歌い
死なば共に と 友の手を取った



第25回上杉雪灯籠まつり 鎮魂祭

昭和52年11月16日、小嶋さんが実行委員長となり、上杉雪灯籠まつりの第1回実行委員会が開催された。そこで決まったことの第一は、「太平洋戦争戦没者の霊を慰める鎮魂塔を雪でつくって、献灯する」こと。小嶋さんが言い出し、他の実行委員からも異論はなかった。鎮魂塔の製作場所を上杉神社境内の招魂碑のある高台とし、ここを「月見の会」のメンバーの一人であった小内山さんの提唱により「鎮魂の丘」と呼ぶことが決定された。

東光蔵元の元専務で、第1回の実行委員会から委員を務める山森茂一郎さんは、「主な委員のそれぞれが戦争体験を持っていた」と振り返る。さらに山森さんは「あの戦争で生き残った者は、言葉にするかどうかは別にして、誰しもが戦死者に申し訳ないという思いがある。雪灯籠まつりの中心を戦没者の鎮魂祭とした小嶋さんは、行動でそれを示したかったのでしょうか」と語る。

雪との格闘、そして市民参加のまつりへ

かくして、第1回の上杉雪灯籠まつりは昭和53年2月7日～8日の両日開催され、6日は前夜祭として鎮魂祭が鎮魂の丘西側で厳粛に挙行された。祭詞は「月見の会」のメンバーの一人であった上村さんが献じた。その後も鎮魂祭では、戦争体験者による祭詞奏上が欠かすことなく続いている。

松が岬公園の東・北の堤斜面と上杉神社境内には、東光、丸の内青年会、南部体育振興会、佐藤造園などの協力によって千数百の雪洞が造られた。米沢麺業組合有志からは「そば振る舞い」が、また小嶋総本店からは「甘酒振る舞い」の申し出あり、甘酒220リットル、献上そばは1日目700食、2日目1,000食が、またたく間に尽した。おとずれた数千人の市民は、雪灯籠の醸し出す幻想的な空間に酔いしれた。

第2回（昭和54年）の雪灯籠まつりは、旧正月元旦の1月28日に予定されていたが、この年は史上まれにみる暖冬で、開催が2月24日～25日に延期された。2月に入ってもほとんど降雪がなく、米沢工業高校体育館北側の雪をダンプカーで運び、ようやく60基の雪灯籠と100基の雪洞を造った。

その後も、雪が少なく晴天の続く年には雪灯籠にベニヤ板で日よけをしたり、雨天にはビニールシートで覆い、塩をまいて雪の解けるのを防ぐなど、自然を相手にするまつりゆえの苦労や工夫が続いている。

第3回目（昭和55年）のまつりでは、市民600人の奉仕で雪灯籠・雪洞が作られ、また、市内のろうそく製造の老舗大丸石油店がろうそくを無料提供するなど、

この頃から、それまでは主に見物する側だった市民の参加気運が急速に高まってきた。

昭和56年からは、高校生の参加が実現し、米沢工業高校、米沢商業高校、米沢女子高校が参加した。特に米沢工業高校では、生徒会の目標に「社会活動に積極的に参加する」ことを掲げ、学校行事として全校をあげて雪灯籠造りに取り組み、百基近い大量製作で貢献した。米沢工高生の参加は現在まで連綿と続いており、同校生徒らが、鉄板で作った型でミニ雪灯籠を製作するノウハウを開発するなど、まつりの主役的な役割を果たしてきている。

このような活動について、昭和57年から24年間にわたり米沢工高に勤務し、平成14年から17年まで同校の校長を務めた上村勸二さんは、「ボランティア活動を通じて生徒と地域社会との結びつきが強くなり、地域に生きる自覚と責任を持ってやり遂げる自信がはぐまれて、非常によい影響をもたらしている」と話す。

現在では、米沢市内の全ての高校のほか、東部小PTA、二中PTA、^{あらまち}桐町商店街なども率先して活動に参加し、市民ぐるみのまつりとして広がりを見せている。

火種30,000プロジェクト

上杉雪灯籠まつりは、今年（平成19年）で開催30周年を迎える。市民有志によって、当初はささやかに始められたこのまつりも、“雪と燭”が醸し出す光景に惹かれて、県外からの観光客も増加し、まつりの当日には歩行者同士の肩がぶつかり合うほどのにぎわいをみせる。

まつりの前後には、沖縄の市民などを招き、雪灯籠造りや雪菜の収穫などの体験観光も実施し、県外客との交流を深めている。

2月は平常であれば市内の旅館やホテルにとって、客の入り込み数の最も少ない時期だが、まつりが開催



「おきたま秋まつり」でのローソク作り体験

される前後は予約客で満杯になる。市内の旅館・ホテルの収容人数は3,500人程度が限度であり、溢れた客は赤湯や上山・天童温泉にまで足を延ばす。今後、雪灯籠まつりがさらに大きく発展するためには、一層の市民の参加や協力による体験観光メニューの充実や民宿の整備など、受け皿の拡充が求められる。

まつりが今年で30周年を迎えるのを機に、実行委員会事務局が中心になり、昨年「市民による、市民のための」まつりを目指して『火種30,000プロジェクト』の活動が展開されている。これは、市民の手作りによるローソクを市内約3万の全世帯に配布し、まつりの期間中、各家庭でローソクの灯をともしもらう運動である。現在、市役所や公民館に使い古しローソクの回収ボックスを設置したり、山大生などが各家庭を回収訪問して、廃ローソクを集め、PTAや子供会、老人クラブなどが中心となって、コミュニティーセンターなどで手作りローソクを再生する活動が進んでいる。

実行委員会事務局の一人である米沢市商工観光課の竹田好秀さんは、「3万世帯それぞれがローソクに灯をともしすることで、市民が主役、市内全体が会場となる。30周年をさらなる市民参加に向けた新たなスタートの年にしたい」と意欲を語る。

悠久の世界平和のために

まつりのメインイベントである鎮魂祭では、平和祈願のために、戦争体験者による祭詞とともに、靖国神社の宮司による祭文奏上が恒例となっている。ちなみに、国内の慰霊祭などに靖国神社の宮司が訪れるのは、現在は米沢の雪灯籠まつりだけである。

しかし、まつりが始まってから30年が経過し、実行委員会のメンバーも、大半が戦争の知らない世代に様変わりしている。祭詞を献じる戦争体験者の選定も、現実的に難しい状況になってきている。

20周年（平成9年）の祭詞奏上を務めた井上忠さんは、祭詞の中で「世代が変わるとも、戦争体験という国の酷たらしい歴史を忘却することはできません。不運にして家族から取り残された満州の遺児や、大黒柱を失ったご遺族のご家族に、戦後は未だ終わりを知らないのであります」と訴えかけた。

年を重ね、実行委員や参加者が、たとえ戦争を知らない世代だけになっても、小嶋さんら「月見の会」のメンバーが雪灯籠に込めた思いを忘れ去ることなく、時代を超え、地域を越えて、変わらぬ雪の美しさとともに、平和へのメッセージを世界の人々へ送り届ける祭礼として、上杉雪灯籠まつりが発展・継続することを祈りたい。

（荘銀総合研究所主席研究員・加藤和徳）



第27回上杉雪灯籠まつり 上杉神社境内

※写真提供：米沢観光物産協会、米沢市